

令和 5 年 6 月 21 日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02712

研究課題名（和文）マルチモーダル分析によるメタ・コミュニケーションの日韓対照研究

研究課題名（英文）A Contrastive Study of Japanese and Korean Meta-communication Using Multimodal Analysis

研究代表者

船橋 瑞貴（FUNAHASHI, Mizuki）

日本大学・国際関係学部・准教授

研究者番号：20533475

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、日韓の自然発話におけるメタ・コミュニケーションをマルチモーダルな視点から分析し、異同を明らかにした。その際、(1)四つの言語使用場面における「注釈挿入」「挿入構造」の分析から、日韓の異なり要因として、両言語の膠着度の異なりに加え、言語使用域(Register)があげられること、(2)日本語の「注釈挿入」における言語的手段の一つである「助詞開始発話」の分析から、統語構造上相当する要素があるにも関わらず、コミュニケーションにおいて、その要素がどのような形で用いられるかには日韓で異なりがあること、(3)「助詞開始発話」の出現には、コミュニケーションの媒体も関与することを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、自然発話を資料とする対照研究において、記述の枠組みを進展させるものである。本研究では、分析のアプローチとして、マルチモーダルな視点からの分析を試みること、言語使用域(Register)やコミュニケーションの媒体を考慮することの重要性、さらには、これまで研究蓄積のある言語形式を対照単位とする分析アプローチに加え、行為欲求から発する分析アプローチの有効性を示した。また、日本語教育への貢献を視野に入れ、日本語学習者による日本語の発話データも参照した。本研究の成果は、学習項目としてシラバスや教材などに取り入れられ、教育現場で活用されることが期待できるものである。

研究成果の概要（英文）：This study examined meta-communication in Japanese and Korean spontaneous speech from a multimodal perspective to clarify the differences between the two. The following conclusions were reached. (1) Analysis of “annotation insertion” and “insertion structure” in four language-use situations revealed that the difference between Japanese and Korean meta-communication is attributable to the differences in the degree of agglutination as well as the register of language use. (2) Analysis of “particle-initiated utterance,” a linguistic expression in Japanese annotation insertion, revealed that there is an equivalent element in the syntactic structure. (3) Finally, the appearance of particle-initiated utterances is also associated with the medium of communication.

研究分野：日本語教育学

キーワード：メタ・コミュニケーション 対照研究 自然発話データ 複数の言語使用場面 談話管理機能 日本語学習者

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

日本語の自然発話におけるメタ・コミュニケーションの一種に「注釈挿入」がある。「注釈挿入」とは、一文節を分断する形で補足的な注釈が挿入される言語現象であり、「規範文法」(prescriptive grammar)の枠組みでは破格とされる構造的特徴を有するメタ・コミュニケーションである。これは、自然発話では日常的に散見されるものの、その形式や機能の整理が十分になされていない言語現象であるが、代表者はこれまでの研究において、(1)談話上の機能は三つに類型化でき、統語上は破格でありながらも一定の言語形式の使用が認められること、(2)言語形式、特徴的な音声、非言語行動、人工物の複合的使用により「注釈挿入」が実現されること、さらに、(3)日本語の指示詞を専門とする研究協力者・平田未季氏(共同研究当時：秋田大学)との共同研究により、「注釈挿入」の核となる言語形式である指示詞の選択と音声、非言語行動との関連性を、指示詞の情報積載量の観点から明らかにした。また、日本語の分析と同様の手法により、学術大会の韓国語口頭発表における「注釈挿入」を分析した。分析の結果、(4)韓国語においては「注釈挿入」が観察されず、その背景には日韓両言語の膠着度の違いが推測されること、文節を分断しない「挿入構造」も、日本語に比して非常に少ないことから、日韓両言語の異なりは、膠着度のみでは説明ができないことを得た。さらに、韓国語母語話者より「口頭発表において「注釈挿入」のような発話を行うのは、発表準備が十分ではない印象を受ける」というコメントを複数得たことから、言語使用域(Register)が関与する可能性が示唆された。これらの知見をもとに、単独の言語使用域において、言語形式を中心に知見が蓄積されてきたメタ・コミュニケーションの研究現状に対し、言語使用域の異なる複数の場面における日本語と韓国語の自然発話で観察されるメタ・コミュニケーションを、言語、非言語行動、人工物の使用などを視野に収めるマルチモーダルな視点から記述・分析し、その異同を明らかにすることが必要であると考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日本語と韓国語の複数の言語使用場面で観察されるメタ・コミュニケーションを、言語、非言語行動、人工物、社会・世界に関する知識や認識などを含んだ総体として記述し、日韓各言語におけるメタ・コミュニケーションの有様、及び、日韓の異同を明らかにすることである。従来のメタ・コミュニケーション研究における分析の枠組みを踏まえ、新たにマルチモーダルな視点、言語使用域という分析要素を取り入れ、言語形式を対照単位とするのではなく、「補足的な説明を行いたい場合にどのような言語的手段を選択するか」といった行為欲求から発する対照分析を行うことで、メタ・コミュニケーションを再分析することを目的とする。具体的には、複数の言語使用場面における自然発話データ(日本語と韓国語)を収集し、会話参加者によるメタ・コミュニケーションの実践をマルチモーダルな視点より詳細に記述する。得られた結果を日本語と韓国語において比較対照することにより、メタ・コミュニケーションの異同を把握する。そして、先行研究による知見と本研究の結果を統合的に分析することで、記述の枠組みを精緻化する。

3. 研究の方法

(1)データの収集：

言語使用域を考慮した日本語と韓国語の自然発話データを揃える。具体的には、あらたまり度とインタラクティブ性を軸として言語使用域を定め、日本語母語話者、及び、韓国語母語話者の各々の母語による、(データ)学術大会口頭発表、(データ)スピーチ、(データ)雑談会話、(データ)顧客会話を収集する。

(2)個別言語における記述・分析：

(1)の日本語と韓国語による各種自然発話の音声・映像データ、及び、文字化データの分析を行い、各言語におけるメタ・コミュニケーションの有様を把握する。

(3)日韓対照分析：

(2)の個別言語における分析から得られた結果を比較対照し、統合的に分析を行う。

(4)先行研究の知見と本研究の分析との統合、記述の枠組みの精緻化：

メタ・コミュニケーションに関する記述的研究の蓄積を踏まえ、本研究でのマルチモーダルな視点、言語使用域を分析要素として取り入れる試みにより、メタ・コミュニケーションの記述の枠組みを精緻化する。

上記の(2)と(3)において、代表者の言語直感が効かない韓国語に関しては、研究協力者・趙南星氏(本研究期間当時：HANBAT 大学)と共同して記述・分析を進める。

4. 研究成果

本研究では、日韓のメタ・コミュニケーションに関して(1)~(3)の成果を得ることができた。加えて、研究計画当初は予定していなかった新たな観点を設けることにより、副次的な成果(4)~(6)を得た。

(1)「注釈挿入」及び、文節を分断しない「挿入構造」について、四つの言語使用場面における日韓の対照分析から次のことを明らかにした。学術大会の日韓口頭発表について、(データ)の日本語では「注釈挿入」と「挿入構造」が共に散見されるのに対し、韓国語では「注釈挿入」が観察されず、「挿入構造」も日本語に比して非常に少ないことが確認された。加えて、観察された韓国語の「挿入構造」が、日本への留学経験を有する韓国語母語話者によるものであったことから、日本語の影響を排除できない産出であることも示唆された。他方、本研究の(データ)、(データ)、(データ)の韓国語においては、「注釈挿入」は確認されなかったものの、「挿入構造」は散見されることが明らかになった。これらのことから、日韓の異なりには、日韓両言語の膠着度の異なりに加えて言語使用域が関わっていること、なかでも、あらたまり度の影響が認められることを得た。

(2)「注釈挿入」における言語的手段の対照分析から、以下のような本研究の分析アプローチの意義を確認した。日本語において「注釈挿入」を実現する際の言語的手段の一つである「助詞開始発話」(発話頭に非自立語である助詞が現れる発話)について、四つの言語使用場面における日韓の対照分析を行った。日本語では散見されるのに対し、(データ)~(データ)の韓国語では観察されなかったことから、統語構造上相当する要素があるにも関わらず、実際のコミュニケーションにおいて、その要素がどのような形で用いられるかには異なりがあることを得た。これにより、言語形式や文法カテゴリーを対照単位とする分析アプローチに加え、「発話の途中で補足的な説明を加える際にどのような言語的手段を用いるか」といった、言語行為欲求から発する分析アプローチも有効であることを示した。

(3)上記(2)の結果を踏まえて実施した、「助詞開始発話」についての新たな言語使用域の分析から、次のことを明らかにした。新たな言語使用場面として、一般公開されているメディアデータ(テレビ番組映像)を分析対象とした結果、韓国語のテレビ番組映像の字幕において「助詞開始発話」が観察された。これにより、「助詞開始発話」には、膠着度、言語使用域に加え、コミュニケーションの媒体も関与することを得た。

上記(1)~(3)の日韓における差異は、韓国語を母語とする日本語学習者への指導にも寄与する言語情報と考えられる。そこで、研究計画当初は予定していなかったが、日本語学習者の日本語によるメタ・コミュニケーションの特徴の把握、及び、日本語教育への応用を検討し、(4)と(5)の知見を得た。これらの知見は、母語が異なる日本語学習者の発話を広く把握するものであり、日本語学習者の母語、及び、習熟度を考慮したメタ・コミュニケーションの教育を検討する際の、基礎的資料となるものである。

(4)口頭発表における日本語母語話者と日本語学習者(学習者の母語は韓国語、インドネシア語、ハンガリー語の3言語)の映像データを、母語の影響も視野に入れて比較分析した。日本語母語話者の「挿入構造」における特徴の一つとして、挿入部の前後においてフィラーや無声休止が伴うことを得ていたが、日本語学習者の「挿入構造」においては、母語によるものと思われるフィラーや聴覚印象としては「長い」と感じられる無声休止が散見された。日本語学習者のメタ・コミュニケーションに母語の影響を捉えた本知見は、日本語教育において有用な情報となるものである。

(5)話者一人がある程度まとまった発話を行うモノログに見られる、談話管理機能を担ったメタ・コミュニケーションに注目した。日本語母語話者による発話、及び、日本語学習者(学習者の母語は韓国語、中国語、英語、スペイン語、ベトナム語の5言語)における発話を比較分析した。本研究では、「助詞開始発話」について、日本語では広く様々な言語使用場面において散見されるのに対し、韓国語ではごく限られた言語使用場面しか見られず、一般的な現象とは言い難いことを得ていた(上記(2)及び(3))が、その知見と本分析結果を照らし合わせると、接続表現(そして/それで/で)の使用において、予想と異なる韓国語を母語とする学習者の傾向が窺われた。これにより、日韓のメタ・コミュニケーションに関する研究を今後も進めていく上での、新たな分析対象を得た。

また、本研究を進める過程においては、上記の他、以下の(6)の知見も得られた。

(6)韓国語データの提供者に高等学校で日本語を学んだ経験がある者が含まれたことから、収集したデータへの日本語知識の影響を確認するため、韓国国内の高等学校で使用されている教育課程日本語教科書(初級レベル、14冊)で扱われる日本語を検討した。検討の結果、本研究が対象とするメタ・コミュニケーションは学習項目として提示されていないことを確認した。加えて、

検討の過程では、文法性には問題がないものの容認性の低い日本語が抽出された。そこで、韓国国内で出版されたビジネス日本語教科書(上級レベル、10冊)でも同様の調査を行った。その過程では教育課程日本語教科書と同様に、容認性において問題のある日本語が抽出された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 2件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 船橋瑞貴	4. 巻 -
2. 論文標題 口頭発表におけるフィラー：口頭発表指導への応用を視野に入れて	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 流暢性と非流暢性	6. 最初と最後の頁 264-279
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 船橋瑞貴	4. 巻 -
2. 論文標題 非流暢で自然な日本語：日本語教育の観点から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本語プロフィシエンシー研究の広がり	6. 最初と最後の頁 123-135
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 船橋瑞貴・趙南星	4. 巻 14
2. 論文標題 学習者の母語を考慮した非流暢性の教育	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ことばと文字	6. 最初と最後の頁 43-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 趙南星・船橋瑞貴	4. 巻 62
2. 論文標題 日本語の教科書の「ストレートな表現」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本近代學研究	6. 最初と最後の頁 181 193
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 趙南星・船橋瑞貴	4. 巻 58
2. 論文標題 韓国のビジネス日本語教材にみられる敬語の誤用	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本語学研究	6. 最初と最後の頁 151-163
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計4件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 船橋瑞貴
2. 発表標題 非流暢で自然な日本語：日本語教育の観点から
3. 学会等名 日本語プロフィシエンシー研究学会 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 船橋瑞貴
2. 発表標題 母語話者の非流暢性と学習者の非流暢性の比較
3. 学会等名 日本認知科学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 船橋瑞貴
2. 発表標題 日本語教育に非流暢性を取り入れる 挿入構造を例として
3. 学会等名 第1回社会言語科学会シンポジウム (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 趙南星・船橋瑞貴
2. 発表標題 日本語の教科書のストレートな表現
3. 学会等名 韓國日本近代學會(國際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	趙 南星 (Cho NamSung)		
研究協力者	平田 未季 (Hirata Miki)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------